

仮名はどこまで音を表せるか

山本 忠行

【要 旨】

日本語の音声を観察すると、仮名表記と一致しない部分が少なくないことがわかる。この仮名と音のずれの考察をふまえ、正確な音を仮名で表記する方法を検討し、外国語音の表記法、音声教育への応用などをさぐった。

【キーワード】 表記・ローマ字・表音文字・発音指導

1. はじめに

日本語表記の複雑さを問題視し、特に漢字使用を制限、あるいは廃止しようという意見は前島密の「漢字御廃止之儀」(1866)以来、数多く示されてきた。中には漢字廃止にとどまらず、仮名も廃止してローマ字化すべしという主張さえあった。国語審議会の目標も設立当初から「文字ハ音韻文字(フォノグラム)ヲ採用スルコト」(1902)とされ、これが1963年までそのままになっていたのである。

日本語のローマ字化は実現しなかったが、漢字仮名交じり表記を維持した点、特に仮名を使い続けているのにはそれなりの理由がある。本稿では仮名に焦点を当て、ローマ字表記と対比しながら、表音文字としての仮名の特性を明らかにし、仮名表記のさらなる可能性について論じる。

2. 仮名の特性

仮名は音節単位、ローマ字は音素単位の文字であるという点が根本的な相違点であることは自明である。これをもとに仮名は遅れた文字であるというような主張も一部にあるが、その裏付けとなる証拠はない。また、過去にローマ字推進派が唱えた、ローマ字に切り替えれば、識字率が高まり、文化の発展、民主主義の発展につながるという意見に同調する人は、今の日本にはいないであろう。

一部の科学的根拠のない主張は別としても、仮名の弱点と利便性を、まず明らかにしておかねばなるまい。

2.1. 仮名の弱点

ローマ字推進派から利点として挙げられるものは、第一に海外で広く使われていること、第二に文字数が少なく字形も単純なので漢字のような学習負担がないという点である。

日本語の標準的な表記は漢字仮名交じり文とされている。日本以外に仮名を用いる国はなく、日本語学習者は母語の表記システム（ローマ字とは限らない）とは別に新たに仮名の学習をせざるをえないが、平仮名・片仮名だけでもそれぞれ約50文字ずつある。表記の馴染みのなさ、複雑さは学習者にとって負担であり、学習意欲をそいでしまうので、日本語普及の大きな障害となっている。

2.1.1. IT時代におけるローマ字の優位性

近年コンピュータの普及とともに、ローマ字の優位性が高まってきている。パソコンで日本語文書を作成する際の入力方式は大半がローマ字入力だという。ワープロの初期には親指シフト方式をはじめ、仮名入力のシステムがいくつか開発されたこともあったが、それも今では廃れて

しまい、限られた利用者しかいない。

キーボードそのものが欧米で考案されたタイプライターがもとになっている。ローマ字入力であれば使用するキーも少なく、3段で済むので、ブラインド・タッチも容易である。仮名で入力するにはどうしても4段使うことになり、指の動く範囲が広がってしまう。また、普段ローマ字で日本語を入力していれば、パスワードやメール・アドレスの入力時、あるいは文書の一部にローマ字を入力するときなどに、日本語入力を切るだけでよく、キーの位置の違いを意識しなくてもよい。もう一つ忘れてならないのが、電子辞書の普及である。ポケットサイズの小さな電子辞書一つで、英和、和英、国語、漢和など多くの辞書を使いこなすには、使用するキーの数が少ないローマ字入力のほうがふさわしい。以前は留学生にワープロで文書を作らせようとする、最初にローマ字入力方式の指導をしなければならなかったが、今では電子辞書を使うことによってローマ字入力方式を自然に身につけるので、わざわざ指導するまでもなくなった。

ローマ字を日常生活で目にする機会はそれほどないにもかかわらず、入力方式としてのローマ字の重要性はかつてないほど高まり、小学生から老人まで、そして日本語学習者に至るまで広く普及している。IT時代を迎えて、ローマ字は圧倒的優位性を確立したと言える。

2.1.2. 外国語などの表記

仮名で最も困るのは、外国語の音を表記しようとするときである。日本語教育の現場でも片仮名で名簿を作ろうと学生に名前を聞いても、うまく書き表せないことが多い。一方で、片仮名から元の語を推測することができないために、意味がよく分からないということもある。人によって異なる書き方をしていることも多いので、データベースを検索しても

求める資料が出てこないこともある。なぜこうしたことが起きるのかというと、日本語は音素の種類が少ない上に原則として開音節であるために、日本語の拍にはわずかに100あまりしか種類がなく、その音韻体系に基づいて生まれたのが仮名だからである。したがって、子音が連続する音節や子音で終わる音節には母音を挿入せざるを得ないので原音よりも長くなり、かなり違ったものになってしまう。

しかし、仮名表記は平安時代のまま受け継がれてきたわけではない。これまでも伝統的な五十音図にはない「スイ」「テイ」「トウ」のような表記を考案して「シ」「チ」「ツ」と区別したり、「ファ」「ヴァ」によって [fa] [va] であることを示すなどの工夫をしてきた歴史がある。これは音節単位の仮名を音素文字的に活用した例と言ってよい。国際化時代に合わせてさらに改良を加えれば、仮名にも新たな可能性が生まれるであろう。さらには外国語教育に生かす道も出てくる。

2.2. 仮名の利便性

では、日本でしか使われない仮名をなぜ使い続けているのかということを考えてみよう。

この命題は言い換えれば、なぜ日本語の表記にローマ字が適さないかということにもなる。ここで参考になるのが、韓国語²⁾やタイ語をはじめ固有の音素文字を使う多くのアジアの言語は、単純に母音と子音を順に横に並べていくのではなく、音節単位の表記が基本となっていることである（中国語も音節ごとに漢字で表記される）。「イチ」「이치」「ᄒᆞᆫ」などと、「ichi」を比べるとローマ字は音節が視覚的につかみにくいことがわかる。

日本語の場合は、さらに拍が関係してくる。特殊拍と呼ばれる長音、促音、撥音は、自立拍ではないため、語頭に立てないなどの制約はある

ものの、弁別素性として重要な働きを持つ。ローマ字では母音だけの拍、促音、撥音は1文字、それ以外の音節は2文字以上になる。母音連続や長音がわかりづらくなる。撥音のあとに母音やヤ行音が続くときにも「'」や「-」によって切る工夫をしないと正しく読めなくなる。仮名書きの場合は特殊拍も含めて、1拍は原則としてすべて1文字で表されるので、拍がとらえやすく視認性が高くなる。

また、日本語には連濁という現象があるが、ローマ字表記からは連濁であることをつかむことは難しい。「honbako」から「ほん」と「はこ」、「ippon」から「いち」と「ほん」に分析するのは、仮名からのほうがはるかに容易である。

以上のことから言えるのは、日本語の音韻体系には拍が重要な機能を持っており、それを示すには仮名が適しているということである。さらに付言すれば、音節単位、拍単位が表記の基本となっているため、縦にも書けるし、右から書くことさえもできる。本の背表紙の見やすさという点では、漢字仮名交じり表記のほうが優れていることはだれしも認めるところであろう。ローマ字で書かれた背表紙を見るために首を傾げるようなことは、日本語では無用のことである。

3. 表音文字としての仮名の問題

平仮名や片仮名は表音文字であるが、必ずしも音を正確に表記しているわけではない。だからこそ、助詞や長音などの表記を定めた「仮名遣い」というものが必要になるのだが、音と表記のずれは、そう単純なものではない。

3.1. 異音

意味の弁別には関係ないものの、実際の日本語の音声にはさまざまな異音が観察される。その中には日本人の意識に上るものと、上らないものがある。

3.1.1. ガ行子音

日本人がある程度意識される異音の代表的なものとしては、語中や助詞の発音に見られるガ行鼻音（鼻濁音）[ŋ]が挙げられる。最近では鼻濁音は失われつつあり、NHKのアナウンサーでも正しく発音できない人が増えているといわれるが、やはりきれいな日本語の使い手になるには鼻濁音が不可欠であることは間違いない。そのためさまざまな発音指導書ではガ行鼻音の表記として「ガ」のように半濁点をつけて表す方式が広く使われている。たとえば、「戦後」は「センゴ」、「1005」は「センゴ」となる。こうしたガ行鼻音の存在を知らない学習者の中には、聞き取りでガ行鼻音をナ行と混同したりすることもある。日本語教科書でもこの表記法が使われれば、学習者の気づきをうながすことにもつながる。[ŋ]を音素とする言語は少なくないので、こうしたガ行鼻音表記が一般化すると日本語の発音指導だけでなく、仮名による外国語表記にも有効であろう。

語中のガ行子音は軟口蓋摩擦音 [v] で発音されることもあるが、日本語学習上問題になることはあまりなく、外国語の発音を示すのに不可欠というわけでもない。脚本やオノマトペでどうしても必要なときはハ行を小文字で添えて摩擦音であることを示してはどうだろうか。

3.1.2. 撥音

日本語で異音の多いのが撥音である。撥音には「ン」1文字しか当てられていないが、逆行同化によって両唇音から口蓋垂音までさまざまな調音点で発音される。学習上は、いずれも無理に [n] で発音しようとせず、自然に発音しやすいように舌を動かせばよいのだが、句末、文末で口蓋垂音 [N] になることと、母音が後続する場合に鼻母音になることには注意が必要である。

ローマ字表記では両唇音であることを意識して、「sempai」などと記されることもある。逆に片仮名表記では「シムポジウム」や「オリムピック」というように元の語の表記を反映させて書こうとする人もいるが、こうした書き方が母音が挿入される可能性があり、かえって元の語との乖離が大きくなる。どうしても [m] であることを示したいときは小さく「ム」と書くなどの配慮が求められる。

外国語（たとえば韓国語や中国語、タイ語など）では音節末の [ŋ] と [ŋ] が区別されることがあるので、「ング」「ンウ」「ヅ」などの表記によって [ŋ] を表すことができるようにすれば、仮名の利便性を高めることができよう。「ンウ」という表記は筆者の考案したものであるが、かつて日本人は中国語の軟口蓋鼻音 [ŋ] を「ウ」で取り入れたことを踏まえたものである。「ング」よりもコンピュータへの入力は容易になる上、小さく「ウ」を添えることで舌が後ろに移動し、自然に [ŋ] に近い発音ができるのではないだろうか。「ヅ」も筆者の考案である。1文字ですむので、広く認知されればこのほうが実用的だと思われる。濁点で軟口蓋鼻音の聴覚印象を表せるのではなかろうか。

日常の発話の中には「ウ」で書かれるものの中に、実際は [m] で発音されるものがある。たとえば、「ウン」「ウウン⁵⁾」「ウーン」などが口を開けて発話される可能性は低い。「うまい」というときに「ウ」で発音して

いる人はほとんどおらず、[mmai] が最も近い表記だと思われる。「馬」や「梅」にしても元の中国語の子音 [m] の持続時間が長いために、日本人が「ウマ」「ウメ」と聞きとった可能性がある。

「フーン」あるいは「フーム」とシナリオに書いてあったとしても、この通りに発音する俳優はいないであろう。口を閉じて鼻から息を出すに違いない。とすれば、この「フ」は両唇摩擦音 [ɸ] ではなく、唇を閉じた状態で無声のまま鼻息を出すのであるから [m̥] と記述される音である。「フーン」の「ン」は口を開けないであろうし、「フーム」の「ム」にしても母音は発音しないはずである。したがって、どちらも [m̥m] か [m̥m:] が実際の音と言ってよい。「ムム」「ムツ」なども口を開けないから [mm] [m] などになろう。しかし、「ハーン」となると口を開けて発音されるので、[haã] [haãŋ] [haãN] となり、両唇鼻音にはならない。

3.1.3. 促音

促音にもさまざまな異音がある。言い換えれば定まった音がないと言ってもよい。それは「っ」で表されるのは、後続の音節の子音を1拍分伸ばすという記号にすぎず、特定の音を表しているわけではないからである。ローマ字表記ではそれを反映して、一般に促音専用の文字は当てられず、子音字を重ねることで示され、「atta」「ippai」「hakken」というように記される。しかし、こう書いたからといって英語話者の発音が日本語の促音に近くなるわけではない。「atta」と書いてあっても読ませれば「アタ」とほとんど同じになってしまう。子音を伸ばす習慣のない学習者には「at-ta」として、まず2音節に分けた上で3拍で発音させるようにする必要がある。このため日本語教科書の中には、促音用に「Q」を用いて「aQta」「iQpai」「haQken」という表記をとっているものも

ある。一拍であることを意識させるための手段の一つである。

一般に「つまる音」と定義されるが、すべてつまっているわけではない。破裂音では「つまる音」といってもよいが、摩擦音の場合は音が出ており、つまってはいない。「あっさり」「ひっし」「マッハ」など発音してみればすぐに確認できる。

有声子音が促音になるのは「ベッド」「バッグ」「ハッブル」といった外来語、あるいは「すっげえ」のような口語や方言などに限られるが、発音上注意が必要なのはザ行である。現代語のザ行音は語頭は破擦音、語中では撥音や促音の後を除いて摩擦音となることが多い。たとえば、「火事」の「ジ」は摩擦音 [zi] であるが、「カレッジ」の場合は破擦音となるので [kareddzi] となり、[karezzi] とはならない。

ところで、オノマトペでは「ギャーツ」「カチツ」「ブルツ」というように語末に促音が来ることが珍しくないが、これは伸ばすべき子音が後続していない。よく観察してみると、先行母音の影響が大きいようである。「アツ」や「エツ」のような広母音や中母音のあとの促音は舌による声道の閉鎖がなく、声門閉鎖音 [ʔ] になる。「アーツ」「エーツ」のように長音化すると、閉鎖せずに有声摩擦音 [ɦ] になる可能性も出てくる。これに対して「ドキツ」「プチツ」のように前舌狭母音のあとでは、舌が歯茎に触れるので [t] となることが多いようである。では後舌狭母音「ウツ」「ウーツ」はどうかというと、[ʔ] もあるが、本当に苦しそうな場合は軟口蓋の閉鎖 [k] が使われるであろう。吐き気の場合は [p] の可能性もある。そうすれば「ウク」「ウプ」などとして書き分けられる。このほうが「ウップ」などよりも実際の音に近くなる。「フツ」は母音が伴わない [ɸ] だけの場合、無声化した [ɸɸ]、あるいは舌で息を止める [ɸɸt] があると思われるが、声門や軟口蓋での閉鎖を伴う可能性は低い。

こうした語末の促音をもっと詳しく表記する方法を考案すれば、オノ

マトペの表現力も高まり、ひいては外国語の閉音節をうまく表記することにもつながるであろう。

3.1.4. 長音

長音は直前の母音を伸ばすだけで、促音と同じく特定の音を持たない。片仮名では「ー」で示されるが、平仮名には長音専用の文字はない。そのため、1946年に制定された「現代かなづかい」では平仮名表記をするときは同音の仮名を繰り返すことを原則とした。ところが、オ列長音だけは「う」で記すことになった。このことによって同じ平仮名でありながら、異なる読み方をするということが生じた。「十日」「投下」は発音上の区別はないが、「とおか」「とうか」と違う仮名で表記される。「おうい」「おおい」に、呼び声「オーイ」を加えると3種類の書き方となる。「小売り」は長音ではなく、連母音であるが仮名書きでは「高利」と区別できない。「子牛」と「格子」も同様である。場合によっては外来語でも「ボウリング」と「ボーリング」のように表記の違いで意味の違いを示すこともある。

また「けいえい」「とけい」「ていねい」のように「い」と書いてあっても実際はエ列長音で発音されることが多いものがある。こうした例は漢字の音読みとしては「い」であるが、ローマ字で書く場合にどうするか課題となる。「経路／毛色」や「営利／絵入り」は仮名書きでは区別できないが、発音は異なる。一部の外来語には、発音の区別はないが、「バレー」と「バレエ」のように書き分けるのが慣習として定着しているものもある。

外来語の長音は発音上も表記上も揺れているものがある。最近よく取り上げられるのが「マネジャー」「マネジャ」である。従来は「マネージャー」と呼ばれていたが、短くする人が増えてきた。特に工業技術用語は語末

の長音符号を省略するのが JIS 用語の慣例となっている⁶⁾ため、「コンピューター」「エレベーター」などに長音符号をつけないだけでなく、発音でも語末を伸ばさない人が増加傾向にある。

長音のローマ字表記は大きな課題である。訓令式では [^] をつけることになっているが、パソコン入力には不向きである。同音を繰り返してもよいが「oo」では [u:] と間違えやすい。仮名表記と同じにしておくのが、入力にはいいが、音とのずれが大きくなる。

3.1.5. 拗音

アナウンサーが苦手とする言葉の代表として、よく「手術中」「火星探査車」「貨客船」などが挙げられるが、特に「しゅ」や「じゅ」の発音が苦手な人は少なくなく、直音化して「しじつ」「しんじく」「しくだい」などと発音されることが多い。これも表記と発音のずれと言える。

日本語学習者にも拗音が上手に発音できない人がいる⁷⁾。多くの場合 [-u] ではそれほど問題にならず、[-a] [-o] のほうが発音しにくいようである。そのため「客」が「キヤク」となったり、「病院」が「ピョウイン」となったりする。拗音は仮名の中で例外的に2文字で1拍を示すので、1拍であることを意識して発音させることが求められる。

3.1.6. 無声化

日本語の発音教育でよく取り上げられるのが無声化である。入門期の学習者のノートを見ると、「kimas」「ksa」「ski」などと書いてあることがある。無声化した母音を省いてそのままローマ字化した結果である。ローマ字表記の場合は仮名以上に母音が意識されるために無声化の表示が重要になる。

仮名と音声のずれということで見た場合、「せんたくき」「さんかくけ

い」「しょうがくきん」などは無声化にとどまらず、母音が脱落してしまい促音化して発音されることが多い。こうした語をローマ字で書く場合、「sentakuki」「sankakukei」とすると実際の発音との隔たりが大きくなる可能性がある。仮名でも「っ」は認められていないので「sentakki」「sankakkei」とするわけにもいかないし、これでは語構成もとらえにくく辞書も引けなくなる。教材には母音を記した上で無声化する部分にIPAと同じように [◌̚] をつけるか、[-] をつけて [◌̚] にすることで発音しなくてよいことを示しておきたい。仮名表記の場合も [◌̚] のほうがNHKの『日本語発音アクセント辞典』の破線の円で囲む表示法よりも手軽でわかりやすいと思われる。

外来語では有声子音と無声子音が入れ替わることがある。一番多いのは促音のあとの有声音の無声化である。「バッグ」「ベッド」が「バック」「ベット」と発音されることがある。促音の後でなくても無声化する例としては「プロマイド」が「プロマイド」となる例がある。逆に無声子音が有声子音になることもある。たとえば「アボカド」をスーパーなどで「アボガド」と書いているのを見かける。正確な外国語の知識がなく、耳で聞いたままを話したり、書いたりするからであろうが、日本人にとって楽な発音になっていることも見逃せない。

3.2. 音の区別がないもの

片仮名で書かれた外来語の中には表記と実際の発音が一致しないものが珍しくない。その多くは唇を使う [v] や [w] である。

外国語の唇歯摩擦音 [v] を「ヴ」で書く人は増えてきたが、「ヴァイオリン」と書いたからといって、実際に下唇を上歯にあてて発音している人はほとんどいない。同音語の書き分けの一種と見てもよいであろう。DVDを片仮名で書いたものを見たことがないが、若者でも多くは「ディー

「ブイディー」であり、「ヴィー」という発音を耳にすることはまれである。

「ノルウェー」「スウェーデン」「クウェート」は「ノルエー」「スエーデン」「クエート⁸⁾」と発音されることが少なくない。「ウイスキー」という表記が普及してきたが、テレビやラジオなどで耳にする発音はたいてい「ウイスキー」である。「スクエア」という書き方も増えたが、多くの日本人の発音は「スクエア」である。最近の広告などでは「スウィミング・スーツ」や「スウィミング・クラブ」書かれたものをよく見かけるが、これも実際はたいてい「スイミング」と発音されている。「サンドイッチ」「スイッチ」も「サンドウィッチ」「スウィッチ」と書く人が出てきたが、実際にこのように発音しているのだろうか。

あまり発音されないのに使われる表記がある一方で、[kwa] [gwa] [kwo] を含む音節は、地名も外来語も日本人の一般的な発音どおり「ア」「オ」を大きく書くことになっている。「グアム」「グアテマラ」「アクア」「クオリティ」などがその例で、原音に近づけて「グァム」「グァテマラ」「アクァ」「クォリティ」と書くことはあまりないようである。以前は時計の広告に「クオーツ」と書かれていたのに、最近では「クォーツ」が増えてきている。しかし、発音の変化はまだ伴っていないと思われる。ちなみに「ウォッチ」となるときわめて少なく、現在は「ウォッチ」と書くのが一般的である。後舌母音のほうが円唇化させやすいので、発音の負担が少ないことも影響しているのであろう。

[ti] [di] は「ティ」「デイ」と書かれることが多くなった。以前は「チーム・ティーチング」が一般的だったが、最近では「ティーム・ティーチング」が多くなった。日本人がそれだけ外国語音に馴染み、発音できるようになってきたということもあるのだろうが、学会などの発表で聞いていても多くは「チーム」という発音である。「デジタル」も「デイジタル」と書いたものが目立つが、発音はそのままのようであるし、「デジカメ」

という表記はまだ見かけない。

3.3. 半母音の挿入と弱化

表記と発音がずれるものの一つに渡り音と呼ばれるものがある。母音連続は発音が不鮮明になったり、言いづらかったりすることがあり、そこに半母音が挿入されることをいう。「ばあい」「おみあい」が「ばわい」「おみやい」になる例がよく挙げられる。「みやげ」など完全に語形が定着して、元の「みあげ」という形があったことすら意識されなくなっている。[aa] [ua] [uo] は [w] が挿入されて [awa] [uwa] [uwo] に、[ia] [io] は [ija] [ijo] になりやすくなる。前項の「クァ」が [kwa] と発音できるのはこうした現象を前提としたものである。[iu] は渡り音というより、融合してしまい [ju:] になってしまう。「いう」「キウイ」は「ゆう」「キューイ」と書いた方がいいぐらいである。現にマンガや広告などで「～とゆう…」とあるのを見かけることがある。こうした現象の一方で、半母音は弱くなってしまい、ほとんど発音されないこともある。「しあわせ」が「シアーセ」に、「かわいい」が「カーイー」になったりする。学習者にこういう発音を身につけさせる必要もなく、わざわざ特別の表記を用意することはないが、日本人の発話を理解するためには知っておくべき事柄である。

外国地名の表記にも影響が見られる。以前は「ロシヤ」「イタリヤ」と書かれたが、今は「ロシア」「イタリア」と書くようになった。ところが、Kenya は「ケニヤ」あるいは「ケニャ」でいいはずなのに、『地名表記の手引』では「語末の(y)a の、その前が子音のときは『ア』と書く」と定め、「ケニア」とすることになっている。これは過剰な修正と言える。この一方で「ギリシヤ」は、共同通信社などのマスコミのハンドブックを見ると今でもそのままである。実際に新聞記事を見てもそうなっている。

しかし、「ギリシア」と書いた本が徐々に増えつつある。『広辞苑』は1969年の第二版から「ペルシア」などとともに「ギリシア」にしている。こうした傾向が続くと原音にかかわらず、日本語で同じような語尾を持つ地名はどれも「～ア」になってしまうかもしれない。ただし、表記が「～ア」になったからといって、発音に大きな変化が起きているとは思えない。

3.4. 揺れ

発音や語形には揺れが観察されるが、それが仮名にも反映されることがある。よく取り上げられるのが「じっぽん」と「じゅっぽん」である。歴史的に見れば「十本」は「じっぽん」と読むべきであるが、これを一種の訛のように誤解して「じゅっぽん」が正しいと考える人が増えてきた。ただし「五十歩百歩」「十把一絡げ」のような慣用句ではこうした揺れはあまり見られないようである。

また「むつかしい」は一種の無声化現象とも言えるが、辞書は「むずかしい」とともに認めている。夏目漱石の作品の中には「六かしい」という当て字すら使われている。

漢字の読みも「情緒」「消耗」など依然と違ってきているものが増えつつある。仮名書きを重視すると、こうした発音の変化も無視できなくなる。

3.5. 新しい仮名表記

マンガや若者向け雑誌には新しい用語や表現とともに、新しい表記が使われることがある。その一つが驚いたときの声「アー」「エー」などで、本来濁点が付くはずがない文字にも濁点を付ける表記である。仮名の表現力を高めるための一つの工夫だと思われる。「アー」「エー」がすでに

有声音であるから、それに濁音をつけてどう発音すればよいのか不明である。「ウ」に濁点を付ければ [v] ということになっているが、「ア」や「エ」に濁点を付けて示すべき特別な子音はないはずである。強いて発音すれば有声声門摩擦音にして [ha:] [he:] とでもなろう。

上記の例が応用できるのは小説や脚本ぐらいしかないと思われるが、こうした自然発生的な仮名表記の中には語学教育に生かせるものがあるかもしれないので、継続的な観察が求められる。

4. 新仮名表記のために

パソコンなどへの入力システムを除き、今後、日本語のローマ字化が進む可能性はきわめて低い。しかし、外国との交流が拡大していけば、外国語音を仮名で適切に書けるように工夫していく必要が出てこよう。外国人が自分の名前、学校や町の名前を仮名で書こうとすると、適切な表記法が確立していないために、悩まされる。無理矢理日本的な書き方に合わせることもできなくはないが、そうするとどうも自分の名前と思えなくなるようである。たとえば、Daniel という学生の名前の書き方にはこれまで「ダニエル」「ダン」「ダニー」などいろいろあったが、中には「ダニア」と書く学生もいた。Emil という学生は「エモ」と書いていた。どちらも最後の [l] の発音が「ル」ではしっくりこなかったために、自分の名前の発音に一番近い仮名の書き方を考案したのだと思われる。最近の英語の絵本がリンゴの絵に「アポー」や「アプウ」などと仮名をつけているのに通じる。中国語話者や韓国語話者の場合は発音どおりに仮名書きをすると、日本語では非常にまぎらわしく、混乱を生じることもある。こうした学習者のためにも何らかの表記上の工夫が求められる。

4.1. RとL

発音ではほとんどの人が [b] と区別していない [v] に「ヴ」という仮名を与えたのであるから、[r] と [l] を区別する仮名もあってもよいであろう。ラ行音は歯茎はじき音であるから、どちらかと言えば [l] に近い発音である。特に撥音や促音の後では舌が歯茎に触れる時間が長くなる。したがって、[la] を「ラ」で表すことにすれば、[ra] を「ラ⁹⁾」としてはどうであろう。定義としては「軽くウを付ける感じで発音する」とでもして、練習用に「ウラ」「ウリ」「ウル」というような表を作ることが考えられる。これによって舌は歯茎に触れにくくなる。

問題は語末の [l] であるが、ほとんど「ウ」や「オ」に近く聞こえるものは「ダニエウ」のようにするか、「ダニエル」として、口の奥のほうで「ル」を軽く発音するというような説明をつければよいであろう。

4.2. 閉音節

外国語の表記でやっかいなのが閉音節である。特にアジアの言語には [p] [t] [k] や [m] [n] [ŋ] で終わる音節がよく使われる。これらの音を促音「ッ」と撥音「ン」だけで表記するのは限界がある。アイヌ語の仮名表記では「ッ」とならんで「プ」「ク」「ム」、さらに「シ」や「ル」など多くの小文字が使われる。これに3.1.2. で示した「ンク」か「ンカ」を加えて [ŋ] を示すことができれば便利になる。[n] に対して「ン」では不十分だと感じるなら、「ヌ」を使ってもよい。

4.3. 円唇化

五十音図には元々「ヰ」「ヱ」「ヲ」という片仮名が存在する。今はこれを使うことなく「ウイ」「ウエ」「ウオ」と書くことになっているが、せつかくある文字の活用を考えたほうがよい。また、かつては「くわじ」

というような書き方が行われていたが、「か」と「くわ」の発音上の区別がなくなったこともあって、「現代かなづかい」で使用できる小文字が制限されたために使えなくなってしまった。現在は外国語の表記では「グア」「グァ」が使われているが、「ア」よりも「ワ」のほうが発音から言えばふさわしい。「クイーン」も「クィーン」にただけでは円唇化の印象が薄い。円唇化を強調するには「クェーン」を認めた方がいいのではないか。

4.4. 有気音・無気音

中国語や韓国語をはじめ、アジアの言語の多くでは息の有無が重要な役割を持つ。これを仮名書きで示すことができれば、人名や地名の区別で非常に便利になるはずである。ローマ字なら有気音に「h」を添えるところであるが、同じように「パハ」「ケヘ」「トホ」など同じ段のハ行音を小文字で添えることで有気音を示すことができるであろう。現にオノマトペでは「プハー」というような書き方も見られるのだから、小文字化し、使用範囲を広げてもそれほど違和感なく受け入れられるのではなかろうか。

4.5. 母音

主に本稿では子音を中心に論じたが、母音の表記は大きな問題である。日本語は5母音しかないが、言語によっては10以上の母音を区別しなければならぬ。[æ]はエ段に「ア」をつけて「ケア」としたものを時折見かける。鼻母音を示したいときは仮名の上に「~」をつければ何とかなるだろう。従来になかった仮名表記として、半広母音 [e] [ɔ] についてはア段に「エ」「オ」をつけた「カエ」「カオ」で [ke] [kɔ] を示し、[ə] の扱いは課題として残るが、「コア」で [kə]¹⁰⁾ を示してはどうだろうか。

5. 外国語教育における仮名の利用

英語教育では最近仮名に注目する人が増えている。中でも島岡丘は早くから仮名に注目し英語教育に取り入れようとする運動を行っている。アルファベットの発音を覚えたからと言って、英語やフランス語の発音がよくなるわけではない。アルファベットは同じでも、一つ一つの文字が表す音は同じではない。それなら、日本人の耳にはどう聞こえるか、日本語の発音から見たとき、どういうふうに発音しようとするか、正しい発音に近づくのかを考える必要が出てくる。そこに仮名の効用があるのだが、そのためには綴りにとらわれず、虚心坦懐にどう聞こえるか、どう仮名書きすれば元の音に近くなるかを追求していかなければならない。

ここで取り上げたのはほんの一例であり、言語によってどのような仮名表記が適切かが違ってくる。¹¹⁾言語ごとの詳細な研究は今後の課題であるが、小文字や濁点・半濁点、および新たな補助記号を工夫すればかなりの音を表記できるようになるであろう。

6. おわりに

各言語はそれぞれの正書法を持つが、それは必ずしも発音を正確に反映したものではない。なぜなら、意味を伝えることは文字にとって音を示すこと以上に重要な役割だからである。英単語の綴りの複雑さ、発音との結びつきの弱さがよく指摘されるが、それは古い書き方、伝統的な書き方を守ることで、語構成や意味の違いをとらえやすくしているからである。「現代かなづかい」が戦後定められたとき、表音式を基本とすることにしたものの、助詞「は」「へ」「を」の書き方を「わ」「え」「お」としなかったのは、同様の理由による。

表記を考える場合は伝統・慣習を尊重しなければならないが、グローバル時代、IT時代を迎え、英語とローマ字がさらに影響力を強めつつ

ある。しかし、仮名表記には、ローマ字にない特有の利便性がある。その仮名の可能性を高めることによって、従来の仮名遣いでは書きにくい音を何とか共通のルールに基づいて記述できるようにしていくことが求められている。本稿ではこの問題を解決する糸口を探るために、仮名と音のずれの考察をもとにして新たな仮名表記の試案を提示した。

これは言い換えれば、余剰素性にすぎないもの（日本語では余剰素性にすらならないものも含まれる）を仮名表記で示すことができないかという試みである。かつて [ti] の音は「チ」あるいは「テ」ですまされていたものが、今では「ティ」として日本語の音として認知されるまでになったのであるから、決して無意味なこととは言えない。

日本人には区別が難しい音、ほとんど意識もされていない音の違いをどこまで表記に反映させるべきかについては、異論があるにちがいない。しかしながら、ここに示した仮名をすべて日常生活で使われるように普及しようというわけではない。外国語の表記や外国語教育、あるいは朗読や演劇などの日本語の発音指導に仮名を工夫して使っていこうということである。この中から実用的だと多くの人を受け入れるものが出てくれば、それが新しい仮名表記の誕生となる。

こうした試みは、日本文化の素晴らしい財産である仮名の可能性を拡大し、有効利用への道を開くことになるものと考えられる。

【注】

- 1) Gelb (1952) が、文字は必ず表語文字から音節文字の段階を経てアルファベットに行き着く、とした説の影響が今でも残っている。かつてアラビア文字を使用していたトルコ語やスワヒリ語、あるいはインドネシア語がローマ字化されたことを賞賛する一方で、タイの少数民族の言語をタイ文字で表記することを偏屈・狭量な民族主義と批判する学者がいる。
- 2) ハングルはさらに徹底しており、音節末の子音は下に付けて書けるので便

利である。

- 3) 日本語の教科書の中には特殊拍であることを際立たせるために長音を「R」、促音を「Q」、撥音を「N」で表記しているものもある。
- 4) たとえば「康 kāng」「将 jiāng」は旧仮名で「かう」「しゃう」となる。
- 5) 大川 (1999) は「ウン」「ウウン」を [NN] [N:N] であるとしているが、口蓋垂鼻音であるとする、口を開けて発音しなければならない。口を開けて発音すれば、肯定・否定の返事ではなく、相手に「そうなのか」と問いかけるときの言い方になり、「アーン」「エーン」とでも仮名書きすることになる。
- 6) JIS の「用語規格のまとめ方」の附属書「外来語の表記」では、長音符号を省く場合の原則として、「その言葉が3音以上の場合には、語尾に長音符号を付けない」を挙げている。しかし、統一は困難なので各専門分野の慣習を尊重することになっている。
- 7) ザ行が「ジャ・ジュ・ジェ・ジョ」となってしまう学習者も多い。
- 8) 一般の外来語は国語審議会の報告で、原音における「ウイ」「ウエ」「ウオ」の音は、なるべく「ウイ」「ウエ」「ウオ」と書くとしているが、これは実際の発音を反映している。しかし、教科書研究センターがまとめた『新地名表記の手引』では、「ウイ」「ウエ」「ウオ」の音は、「ウイ」「ウエ」「ウオ」としないで書く、ことになっている。
- 9) 濁点は子音が声帯振動によって強く聞こえる印象を与えるので、ふるえ音にあてるのが適当であろう。
- 10) 島岡 (1998) は [æ] を [エア]、[ə] を [エア] としているが紛らわしい。
- 11) たとえば、[θ] や [ð] を使う言語は英語に限らずいろいろあるが、これをどう表記するかも問題である。英語の「the」を [da] で発音するピジンも多い。なぜそれが可能なのかというと、英語の [d] は後ろ寄りの [d] であり、これと歯裏音 [ɖ] が区別できればよいからである。このことを応用すると、「ダ」（下線は歯の部分で発音することを示す）としたほうが「ザ」より発音指導にはいいのではないか。同様に「think」も「スィンク」や「シンク」では通じにくいので、思い切って「ティンク」として、外国人に通じる「Japalish」を目指すのも一案である。

【参考文献】

- 大川 英明 (1999) 「日本語における文字と発音の多様性」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第9号
- 教科書研究センター編 (1978) 『地名表記の手引』ぎょうせい
- 共同通信社編 (1973) 『記者ハンドブック』共同通信社, 2002
- 島岡 丘 (1998) 『中間言語の音声学』小学館プロダクション
- 武部 良明 (1980) 「日本語教育における片仮名の問題」『日本語教育』42号
日本語教育学会
- 中川 裕 (1995) 『カムイユカラ』片山言語文化研究所
- 日本規格協会編 (1988) 『JISハンドブック標準化』日本規格協会
- 山本 忠行 (1997) 「日本語教育におけるローマ字問題」『創価大学別科紀要』
第11号
- Gelb, I.J. (1952) *A study of writing: the foundations of
grammatology*. University of Chicago Press.